

| | | | |
|---------------|---------------|------------------|------------|
| 弘化三年丙午春繪補 | | 皇都畫家名所比擬譜 | |
| 土佐光孚 廣島 廣島 | 光祿 太田社 神宮寺 | 小澤華嶽 北宮 | 森義章 北宮 |
| 嶋田雅高 大原 三宮 | 浮田一息 野宮 | 岡本亮彦 甲洲 | 森雲外 甲洲 |
| 内藤素文 御膳山 | 竹村文賦 高野 | 空澤輝龍 赤松 | 百々廣幸 赤松 |
| 村瀬雙石 赤松 | 土佐光文 下鴨 | 中村春亭 千早 | 土佐 |
| 土佐 | 浦生竹山 川原 | 駒井春禮 白鳥 | 村上松嶺 常盤 |
| 狩野英彦 大文字 | 鈴木百手 小宮 | 山本梅仙 大宮 | 中嶋南章 大宮 |
| 木村梁舟 三浦 | 松尾秀山 三浦 | 狩野水信 三浦 | 吳五文 三浦 |
| 田中日華 三浦 | 有丰 三浦 | 大原吞舟 三浦 | 下村良進 三浦 |
| 山口末嶽 三浦 | 青根九江 三浦 | 松田蘆山 三浦 | 松川雪江 三浦 |
| 座田重就 三浦 | 三谷五峰 三浦 | 長澤蘆洲 三浦 | 蘆鳳 三浦 |
| 中林竹洞 三浦 | 羽倉可亭 三浦 | 山本梅仙 三浦 | 狩野英彦 三浦 |
| 清水有斐 三浦 | 冷泉為恭 三浦 | 山田龍湖 三浦 | 近藤有芳 三浦 |
| 中林成業 三浦 | 小田百合 三浦 | 柴仙溪 三浦 | 磯野華堂 三浦 |
| 大角南耕 三浦 | 浦上春琴 三浦 | 北川祭魚 三浦 | 吉村了齋 三浦 |
| 吉村孝一 三浦 | 大口秀芳 三浦 | 圓山應立 三浦 | 原南嶺 三浦 |
| 狩野秀信 三浦 | 中嶋南章 三浦 | 來成 三浦 | |

口絵2 皇都画家名所比擬譜 (右部分)

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|------------|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 山本探齋 廣島 | 清水松園 仙入 | 江森琴一 仙入 | 森寬齋 仙入 | 横山清輝 仙入 | 清水香雪 仙入 | 岸 盛 仙入 | 岸 禮 仙入 | 織田信彦 仙入 | 岸 誠 仙入 | 僧 清死 仙入 | 僧 清死 仙入 | 横山華谿 仙入 | 岸 連山 仙入 | 岡本俊彦 仙入 | 原 在敬 仙入 | 服部元戴 仙入 | 山本梅仙 仙入 | 富田光影 仙入 | 國分文支 仙入 | 笠川友泉 仙入 | 村田 俊 仙入 | |
| 谷口華明 仙入 | 東 寅 仙入 | 川田暢堂 仙入 | 今小路悠上 仙入 | 中馬馬溪 仙入 | 脇坂湖山 仙入 | 狩野水嶽 仙入 | 石田悠汀 仙入 | 小西松坊 仙入 | 澤 吳岐 仙入 | 岸 龍山 仙入 | 岸 順堂 仙入 | 岸 華陽 仙入 | 岸 良 仙入 | 霍堂 仙入 | 勝山琢文 仙入 | 宮脇慶福 仙入 | 安藤丹雀 仙入 | 狩野春山 仙入 | 八木奇峰 仙入 | 山川文麟 仙入 | 安藤松坡 仙入 | 狩野文程 仙入 |
| 岸 霍洲 仙入 | 望月玉川 仙入 | 古市金峨 仙入 | 前川五嶺 仙入 | 林 蘭雅 仙入 | 多村舉秀 仙入 | 原 在親 仙入 | 吉茂慶峰 仙入 | 山本季彦 仙入 | 久留田雪鷹 仙入 | 大倉登山 仙入 | 深渡精齋 仙入 | 白 芝山 仙入 | 藪田文暉 仙入 | 松林鳳卿 仙入 | 河村時鳳 仙入 | 文 鷗 仙入 | 藤重春山 仙入 | 國師應峯 仙入 | 山本梅逸 仙入 | 有山旭圃 仙入 | 吉田後山 仙入 | 梅川東南 仙入 |

口絵3 皇都画家名所比擬譜 (左部分)

「皇都画家名所比擬譜」について

岩 佐 伸 一

はじめに

江戸時代後期には絵師の名が載る刊本が次々と発行された。よく知られているところでは、『古今墨蹟鑑定便覧』や『画乗要略』のように現存、物故双方の名のあった書画家を対象としたもの、『平安人物志』のように学問や芸術、諸芸の分野で名のあった当時現存の人々を対象とした名鑑が挙げられる。絵画史研究の面では、いずれも絵師の伝記や活動時期を知るうえで有用な資料といえよう。また近時は、江戸時代後期から明治時代にかけて隆盛を迎えた書画展覧の開催に際して発行された目録も公刊されている¹⁾。書画展覧目録には、おおむね書画の別や画題が載っているため、公開を前提とした会にどのような作品を出品していたのか、また地方での開催も多いためにその地域と掲出される絵師との関わり方、主催者または開催契機と絵師の関係性などに着目すれば、絵師の活動を知るに一定の参考資料となる。これら冊子の形態を取るもの以外にも絵師の名前がみられる印刷物は数多くある。しかしながらそれらが集成されたことはなく、また紹介される機会も多くはない。筆者はそのような絵師の名が載る一枚刷の印刷物からも絵画史研究において有益な情報が得られるのではないかと考え

関心を持っている。本稿では弘化三年（一八四六）に発行された「皇都画家名所比擬譜」の紹介を通して、幕末期上方の絵師層の厚さを示し、かつ現在は研究の対象とはあまりなっていない当該時期の研究の深化を願うものである。

絵師に関する一枚刷の展開

江戸時代の上方における絵師に関する一枚刷について、多数の存在が予測されるものの管見の限りでは後掲表の通りを確認した。まずはそれらの展開を概観する。

明和八年（一七七二）刊行の「和漢書画一覽」は、現存物故双方の和漢の書画家を列記した横型両面刷の資料である。記載は「本朝墨蹟」「本朝画工」「中華書画」「儒家諸先生」「書家諸先生」などの複数のグループに分けられ、冒頭は「嵯峨天王」ら三筆三蹟から始まる。絵師に着目すると「本朝画工」の部に桃田柳栄以下、主に三都の絵師の名が列挙され、居住地域と師承関係、別号などが付される。英一蜂や法橋宗達、西川祐信らの名も見えるが、大半は狩野派絵師であり、大雅や蕪村など文人画系絵師の名は見られない。選者は「泉南岸城下 尚

古齋」とあり、京や大坂以外の地でも絵画愛好者がいたこと、また地方においても多数の書画家の名を知る人物の存在が知られる。続く享和元年（一八〇一）刊行の「平安画家名字録」も絵師の名号を列記するのみだが、こちらは当時現存の京都の絵師に限り、土佐光貞や鶴沢探泉らの禁裏御絵師が冒頭に位置する。上下二段組とし、形態は折帖形式を取る。この二点は絵師や書画家の配列に何らかの意図を感じさせるものの、一見して明瞭な序列化を意図したとはいえなさそうであり、ひとまず簡易な名鑑と位置付けられよう。これに対して文化四年（一八〇七）刊行の「浪華画人組合三幅対」は、「勸進元」や「差添人」「頭取」「行司」「世話人」などの役職が明示され、相撲の番付に倣ったことが明確となる。絵師に関する情報は姓名と居住地、および画風によるグループ（唐と和）である。これ以降、相撲の番付に倣ったいわゆる見立番付の形式を取った絵師に関する一枚刷が多く見られ、氏名の列記だけではなく、編者による絵師を対象とした序列の可視化を前面にした資料が多く見られる。これに類する資料としては「浪華画家見立角力組合二幅対」「平安画工視相撲」「古今丹青競」「都名筆画合」などが挙げられる。より時代が下ると相撲と並んで人気のあった芝居における役者の給銀を序列に取り入れた「帝京画家給銀位定」、橋梁の長短に絵師の序列を重ねた「浪華風流月日評名橋長短録」、金銭的価値に比した「南宗書画品価値録」など、序列化の基準に多様な指標を採る資料が登場する。さらには本稿で取り上げる「皇都画家名所比擬譜」は絵師に名所を当て、「同心御好乃道」は恋をキーワードとして絵師の評を行うなど、序列のみを前面にするのではなく、それとは別の方途で絵師を見立てまた評する資料が見られる。そのほかには、土佐家の系譜を主体とした「本朝画事」、諸学諸芸の流派を概説した「諸

流家元鑑」などは序列化を行わず、事実のみを記載する資料が挙げられる。

以上からすると、絵師に関する一枚刷が作成された初期段階では、名鑑としての機能のみであったものが、次第に相撲番付の要素を取り入れた序列の可視化を志向し、さらには序列以外を指すべく、様々な工夫による絵師評の一枚刷化が行われたという流れが知られよう。

さて、これらに関する絵画史からの先行研究はわずかである。武田恒夫「近世の大坂画壇」において大坂における文化年間初頭の絵師の盛況ぶりを示す資料として「浪華画人組合三幅対」と「浪華画家見立角力組合二幅対」が取り上げられ、双方の資料に見られる「唐」や「和」、「南流」と「北流」との対概念による絵画の分類に関心を寄せる。続く田中敏雄「画壇研究のための二資料」においては、^③木村兼葭堂十三回忌に際して行われた展覧の目録「癸酉九月展覧目録」に続いて「浪速諸流画人名家案内」が紹介される。画風による区別を行わない一枚刷を紹介し、列記される絵師名より天保初年の大坂には様々な画風を以って活動していた絵師の存在を確認する。横谷賢一郎「番付にみる幕末京都画壇の状況」では、^④「皇都開業名家対幅集」を取り上げ、『平安人物志』には明示されない当時の京都の絵画界における序列および画派の勢力具合を読み解く。このように絵師に関する一枚刷は、当時の絵画界の総体を把握し、画派の勢力具合を概観するに有益な資料として取り上げられてきた。

史料の概要と翻字

本稿で紹介する資料の概要は次の通り。

名称 皇都画家名所比擬譜

作者 雅中俗俗中雅人

材質 紙本墨刷

法量 縦三五・一 横九六・六センチメートル

年代 弘化三年（一八四六）春増補

翻字

（枠外部分）

弘化三年丙午春増補

此古板此度相求申候ニ付改賣出し申候尤作者之改書ことく／諸先生之思召ニ不叶も可有御座候得ともご憐愍を加へ被下海内へ／普くさせ玉へ利得を得させ玉へと奉願上候 版元某謹白

（枠内のうち資料名および識語）

皇都画家名所比擬譜

太平ノ御代ノ切ニ名譽ノ人多シ今比較スルハ専盛ニ世上ニモテハ／ヤスヲ出ストイヘトモ／全的當ナルニアラス粗茫ノ喩ナリ□（筆者注 宝珠が図示される）印ハ／高老ノ先生之画ニヨラデ其人ノ僻ヲ當タルモアリ故ニ校ニ甲乙／アリ見ル人察シ玉へ尤モ卦内ノ諸先生意ニ不能多カルヘ誤罪／厚宥シ玉へ作者性名ヲアラハサル、ルハ憎マレテ暗殺ヲ畏悸ス／ルユヘナリ 雅中俗俗中雅人誌

資料本文にあつては、比較的明瞭な文字で記されているために翻字の必要性は高くないと考え、ここには挙げなかった。よつて写真（巻頭口絵1～3）で確認されたい。

史料の解釈と意義

本資料は、冒頭の年記より幕末の弘化三年に発行され、題名からは京都の画家を名所になぞらえ順序だてて書き並べたものと解することができる。翻字に掲げた通り、本資料枠外右下には版元の、題名に続く枠内下には編者による一文が記されている。この種の一枚刷には版元が明示されることは少なく、編者も個人を特定できないような名で表されていることが多い。本資料もその例に当てはまり、版元は「某」、編者は「雅中俗俗中雅人」となっている。版元の言によれば、本資料の基となった「古板」が存在し、それを改訂して刷り出したものが本資料であるとする。記載対象となった絵師に対しては、意に沿わないことがあるだろうが免じるように乞う。一方編者にあつては、世上に持て囃される絵師を取り上げたが、画風のみならず絵師の癖なども地名に絡めたとし、こちらも絵師の意に沿わないことを詫びる。末尾には「暗殺を畏悸スルユヘ」として編者の名を明らかにしないと記す。この記載からは幕末の京都における世情の不安をうかがわせ、かつ記載対象となった絵師からの反論を避ける意図も知られる。

本資料に掲出されている画家は全部で二九名であり、上中下の三段に分けられる。各段は四三の矩形に分けられ、ひとつの矩形ごとに絵師一名が当てられる。その中は絵師名、二か所の名所、注記の三つ

の要素で構成される。絵師は京都に本拠を置いた現存の者が対象となり、名所は社寺をはじめとする人工物のほか、山川池沼、森などの自然物、また地域名に及ぶ。横長で上部から複数段にわたって人名を挙げるという全体的な形式は、京都や大坂相撲の番付に通じる点があり、当時の上方の人々には単なる表としてではなく、序列を意図した番付に類することも認知されたと考ええる。

力による序列の可視化であるところの相撲番付に倣ったということは、本資料での序列に何らかの意図がある可能性が考えられる。まずはそのあたりを確認する。上段の冒頭に位置するのは、絵所預を務め当時は従四位上土佐守の官位にあった土佐光孚であり、その次には従四位下三河守の官位を得ていた土佐光祿が来る。これだけを見ると、禁裏に近い絵師を冒頭に据えるため官位の順かと思われるが、続く小沢華岳は、官位はもとより僧綱位の受領、公家や有力寺院また大名家の出入りとなり何らかの身分を与えられたとのことは知られていない。またこの頃すでに官位を得ていた土佐光文や光清らも上段ではあるものの、その前には幾人もの町絵師が並ぶ。同じことは禁裏御用を務めた鶴沢探龍、有栖川宮家に入入りし正六位下筑前介の官位を得ていた岸岱をはじめとする岸家の面々、地下官人の島田雅喬らにも見える。地下官人で官位を得ていた座田重就、禁裏御絵師の狩野永岳、春日絵所を務め僧綱位をも得ていた勝山琢文らは中段、地下官人のうち藏人所衆にあつた冷泉為恭、同じく主水司史生兼水部にあつた河村崎鳳は下段に位置している。よって冒頭の二名を除き、官位は本資料の序列に絶対的には影響していないことが確認できる。

本資料に近い時代の『平安人物志』に目を向けると、同書天保九年版では、画の部では筆頭に土佐光孚、光清らの土佐家絵師が位置し、

その後は鶴沢家、京狩野家、円山家、岸家、原家、さらには地下官人が続く。嘉永五年版では、円山家に代わって勝山家が見えるほかはほぼ同様であり、冒頭部分は官位や家格を意識した結果の配列といえよう。同書の凡例には、名前は聞き知った順番によるの一条があるものの、画の部にあつては家格により整然と並んでいる様子からはその一文をそのまま受け入れることはできない。これに対して弘化四年（二八四七）の序を持つ吉田俊山編『皇都書画人名録』では、その配列は「三条の東を初めとし南より西北と序してもとの東にめくる」とあり、京都の東（栗田、知恩院あたり）から時計回りの順に書画家を列挙している。これを踏まえて本資料へ目を向けると、絵師名の下に併記されている名所のうち、右側はおよそ京都北郊から比叡山麓から東山伝いに南下し、醍醐や宇治、大山崎あたりを経て西北方向へ、そして再び京都の北へと向かう。その後、太秦や神泉苑、壬生、東寺など御所から見てやや西南方向の名所が十ばかり続く。左側の名所は地理的観点からは配列に統一性は確認できない。さて右側の名所に着目すると、出発地点は異なるものの、時計回りを基準として配列する手法は『皇都書画人名録』と同一であり、かつ年代もごく近いところから、双方には何らかの関係性があるとも推測される。このように本資料の序列は、冒頭の土佐家二名を除いて絵師の家格によるものではなく、当てられた名所の位置関係によるものであるといえる。続いて、その名所と当てられた絵師にどのような関係性があるのかをいくつかを例にして見る。

筆頭の土佐光孚には上賀茂と嵐山の名所が当てられ、上賀茂の下には「都第一ノ大社」との注記がある。光孚は、土佐家分家の出身ではあつたものの、本資料発行当時には本家の土佐光祿よりも高い官位を

得ており、京都の絵師では随一の高位であったゆえに山城国一宮とも称されるいわゆる上賀茂神社と名高い名勝の嵐山が宛がわれたといえる。続く光祿には、太田社と桂宮院が挙げられ、太田社には「神山ノ内ナルユヘコノ処ニオク」と出る。太田神社は上賀茂神社の境外撰社であり、神山は上賀茂神社の御神体山であるところに由来する注記であり、上賀茂神社を土佐家と見立て、光祿はそのうちに含まれるために当てられたと解することができる。本家と分家の関係でみると、光祿が先に掲出されてもおかしくないのだが、分家とはいえ光孚のほうが高位であったため、それを反映した的確な位置づけであり、編者が当時の絵画界に通じていた様子がうかがい知られる。もうひとつ挙げられた桂宮院は、太秦にある広隆寺にあり、聖徳太子ゆかりの地とされる。禁裏御絵師として天皇家にゆかりがあり、かつ前項の光孚の嵐山からはさほど遠くはないために当てられた名所であろう。

このように家系に基づき隣接して絵師が挙げられる例はほかにもみられる。例えば上段中ほどの岸岱、岸慶、岸礼の岸派宗家の三人である。岸岱には浄土宗総本山知恩院と伏見の御香宮が当てられ前者には「惣本山ナリ」との注記がつく。岸岱の長男岸慶が続き、浄土宗捨世派本山で知恩院に囲まれた場所に位置する一心院と松尾七社のひとつ松尾月読社が挙げられる。前者には「本山ノ内ナレハナリ」との注記が付く。また同じく岸岱の子岸礼には雀林と平岡八幡が当てられる。雀林には「上ニ同シ」とあり前項の岸慶に出る「本山ノ内ナレハナリ」との記載を受けている。雀林がどこを指すのかは明らかにしえないが、雀林は佛涅槃を指す用語であるため、知恩院境内にある浄土宗開祖の法然終焉の地やその廟を指すことも考えられよう。よっていずれも岸家物領の岸岱を知恩院と見立て、それに連なる岸慶と岸礼を当てたと

できる。同様のことは、義亮と清亮、田中日華と有年、長沢芦洲と芦鳳、岸龍山と順堂、岸良と雀堂、小田百谷と学仙、吉村了齋と孝一、中島来章と来成、河村琦鳳と文鷗にもいえ、掲出にあたっては家系を意識していた様子が知られる。なお岸岱らにおける第二の名所である御香宮と松尾月読宮と平岡八幡の関係性は、いずれも神功皇后とその皇子である応神天皇に縁が深い神社であることによると考える。また、義亮と清亮における広沢池と大沢池はどちらも日本を代表する著名な沢池であり、平安時代の僧西行は双方ともに詠み込んだ歌を残すため一具とするにはふさわしい。吉村了齋と孝一にあつては、源義経の家臣佐藤継信と忠信兄弟の墳墓とされる忠信塔と次信塔が第二の名所として当てられており、明瞭にその関係性が知られる。

画風や作品と名所が関連付けられている者としては、上段に出る浮田一蕙の矢瀬、すなわち八瀬には「専古風をクヅサズ」とあり、八瀬の古風な習俗と一蕙の復古やまと絵の作風を、また中段に出る鈴木百年に当てられた名所鳥羽里に「オモシロキ画アレハナリ」と注記があり、鳥羽絵との関連付けがなされているといえよう。同じく中段の小路悠山は百丈山に「岩石ミゴト也」とあり、現在の京都府和束町にある百丈岩の見事さを悠山の山水画に掛けたものと知られる。さらに挙げるならば、沢渡精齋は京都北郊、丹波との境に近い大悲山が当てられ「南北二宗ヲハルカニ見テ国堺ニ有カト判アリ」との注が付けられる。これは精齋がもとは四条派の紀広成に学び、のちに文人画も善くした貫名海屋門に転じ双方の筆意を得ていたためになると解される。

続いては姓名と名所の関連付けである。例えば下段の冷泉為恭には第一の名所に小倉山が当てられており、注には「姓ニヨリテココニオ

ク」と記され、これは小倉山に山荘を構えた藤原定家の流れをくむ公家の冷泉家からの連想であろう。なお為恭の第二の名所は「智積院別所」との注がある六波羅蜜寺であり、本所にあたる智積院は狩野永岳に宛がわれており、叔父永岳と甥為恭の関係が含意とされている。姓名との関係性で近い当て方に、字面の類似がある。大原呑舟は名所のひとつに大徳寺塔頭で源義経ゆかりといわれる大源庵が挙げられている。これなどは大原と大源の字面が似ていることによるものかと推測され、同様の例としては、吉阪鷹峰に鷹峯、島田雅喬は「風雅ナル所ニテソノ名タカシ」との注がある大原が当てられており、これは雅喬の名を注に出る「雅」と「タカシ」すなわち「喬」に当てていると推測される。

また職掌を名所に反映させた例としては、上段の鶴沢探龍が「王城鬼門ヲ守護ナリ」との注記のある赤山社が当てられ禁裏との関係性を示す。同じく上段の土佐光文に宛てられた下鴨は山城国一宮としての下鴨神社を想起させ、家格としては京都の絵師の筆頭格に位置することを暗示させる。またひとつおいて隣の土佐光清は吉田社が当てられ「神祇長ノ所 画家ノ長」と注記があるところから、神祇職の高位を世襲した吉田神社の吉田家に絵所預を務めた土佐家を掛けたものと解することができる。

そのほかには、個人の性向や嗜好、動向を名所に関連付けしたものが散見される。中段の羽倉可亭には鹿飛が宛てられ「日本国中ヲ飛行スルカユヘナリ」との注記が付くため、各地を遊歴していた様子が知られる。下段の小田百谷こと海僊には「大天狗ノ住所ナリ」との注がある愛宕山と、「台浄論アル地ナレハ也」の注がある大原の勝林院が当てられる。海僊は当時の京都の絵画界や文苑で種々の摩擦を起こし

たとされるが、鼻が高い天狗に因む愛宕山、また大原談義の場となった勝林院からは、海僊の慢心や争論好きな性格を揶揄する編者の意向を反映したといえよう。同じ段の北川祭魚には双岡が当てられ「画卜俳諧ト双岡」との注記が付くため絵と俳諧を兼帯していた様子が伺い知れる。望月玉川には「茶道モヨクセリ」とあり「茶人面」とも称される大徳寺を宛がうため、玉川が茶に通じていたことが知られる。備前出身の絵師で京に住まっていた古市金峨には源義経が奥州へ旅立ちに際して参詣したとのいわれを持つ門出八幡が当てられる。その注記には「当時本国ニ行」とあるため、金峨が備前に旅立っていたことを掛けているのであろう。

このように絵師と名所の関係性について首肯できる解釈が成り立つ絵師もあれば、その名が現在に伝わらず、いかなる師系にあるのか、その作風や伝歴も不明な絵師もおり、すべての絵師について解釈を明らかにすることは本稿筆者には難しい。

では本資料の意義はどこにあるのだろうか。

ひとつは弘化三年当時の京都に二九名の名知られた絵師が活動をしていたということが確認できる点にある。本資料の翌年には『皇都書画人名録』が刊行されており、こちらには書家や俳諧師も記載されるが、絵師または他の技芸と画を兼帯したものとして二三七名が数えられ、画風の別、師承関係や住所、名号が記される。掲載者数や情報量としては及ばないものの、『皇都書画人名録』には記されない事柄、すなわち「皇都画家名所比擬譜」の識語にも述べられているように「其人ノ癖」などの人柄や行動、さらには世評の一端が本資料には記されていることが、絵師の人物研究に役立つであろう。

また、書林仲間での事前検閲がある冊子形態の書物に比べると、一

一枚刷は即時性が高いために出版時に近い状況を反映すると考えられる。よって当時の絵画界の最新の状況を示すと考えられる。

さらには、版元の口上には「売出し申候」「利得を得させ玉へ」とあり本資料は利潤目的の売品であったことがわかり、購買者の存在が想定された上での制作であった。よって絵そのものだけではなく、この当時には絵師にも関心を寄せる享受者があり、かつそれらはこの種の刷物が版行されて利益が見込める程度の人数であったことを明らかにする資料ともいえる。書画愛好者が中心的な購買層という限定された範囲とはいえ、不特定多数への販売が想定される以上、一定の信のおけるものでなければ受け入れられなかったであろう。よって記載の内容はある程度実態が反映された結果と推察する。

本資料が版行された弘化三年前後は、呉春高弟の岡本豊彦や松村景文らが没した直後であり、中林竹洞や山本梅逸、狩野永岳や冷泉為恭、浮田一蕙らの画業が個々に注目されるものの、この時期の絵画界全体を把握すべき視点に立った研究はなされていまいと考える。近代日本画の黎明期に名高い岸竹堂や森寛斎らは比較的若年ではあるものの、この時期の絵画界から様々な影響や示唆を受けて画業を構築していったことは間違いなく、彼らの作画を考察するうえでも、この時代の絵画状況を把握する必要性は十分に認められると考える。その際に当該時期に名のあった絵師を概観する資料としての存在意義もあろうか。

おわりに

本稿では江戸時代後期の上方における一枚刷に注目し、特に「皇都画家名所比擬譜」を紹介した。

一枚刷という形態にこだわらなければ、桜田澹斎『諸名家階級』や『画人等級』（いずれも宮城県立図書館蔵）には複数の絵師の番付が記される。また序列意識も含めて絵師に関する見立てを行った資料、すなわち絵師を別の何かで表現し、また評したものの、という観点に立てばさらに資料は増える。知られたところでは安政年度の御所造営にかかる「御造営御絵 東山春秋展覧観之世評役者見立」（いわゆる『平安画家評判記』）が挙げられるが、これ以外にも「平安画家魚鳥風味批評」や「儒医画工役者見立評判」も江戸時代後期の上方の絵師の知る好資料といえる。⁶⁾

江戸時代の学芸分野における見立番付や人物評に関するアプローチは、国文学の中野三敏氏をはじめ複数の成果があるものの、⁷⁾ 絵画史からは絵画史からの解析も必要である。絵画史からこのような資料にアプローチすることにより、資料自体をより正確に読み解くことができる。とともに、絵師の伝記や評価に資することとなり、作品研究にも寄与するところがあると考えられる。また、日本文化の表現方法のひとつとして浮世絵研究や国文学において盛んに議論されつつある「見立」と「やつし」など近接する分野への知見の提供などに寄与する可能性もあろう。

些末な資料と見える絵師に関する一枚刷だが、如上の通り筆者にとっては意義のある資料と思えたため、かつ絵画史研究において注目の薄れがちな江戸時代後期の上方絵画研究の深化を願い、その一例をここに紹介した。

【註】

- (1) 後藤憲司編『書画展観目録集成 景印冊上／景印冊下』（日本書誌学大系 一〇七（一）、（二））青裳堂書店 平成二九年
- (2) 大阪市立美術館編『近世の大坂画壇』展図録（昭和五七年）所収
- (3) 大阪市立博物館編『近世大坂画壇』（同朋舎出版 昭和五八年）所収
- (4) 京都文化博物館学芸第一課編『京の絵師は百花繚乱』展図録（平成一〇年）所収
- (5) 赤井達郎『京都の美術史』（京都新聞社 平成二年）に翻字が載る。
- (6) 管宗次『京大坂の文人 続 幕末・明治 付「大和国名流誌」』（和泉書院 平成一二年）に翻字・解題が載る。
- (7) 中野三敏『江戸名物評判記案内』（岩波書店 昭和六〇年）、揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』（角川書店 平成一三年）、前掲注六管氏著書、林英夫・青木美智男編『番付で読む江戸時代』（柏書房 平成一五年）、瀬木慎一『江戸・明治・対象・昭和の美術番付集 書画の価格変遷二〇〇年』（里文出版 平成一二年）などが挙げられる。

【謝辞】

翻字にあたっては木土博成氏（大阪歴史博物館）のご教示を得ました。記して謝意を申し上げます。

表 江戸時代における上方絵師に関する一枚刷（稿）

| 番号 | 名称 | 作者 | 版元 | 年代 | 所蔵 | 出典および備考 |
|----|---------------|-----------------|----------------------|--------------------------------------|--------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 和漢書画一覽 | 選者 泉南岸城下 高古齋 | 書林 大坂心斎橋順慶町 甲谷佐兵衛 | 明和五年（一七六八） 御免 明和八年（一七七二） 出版 | 個人蔵 | |
| 2 | 平安画家名字録 | 釣玄堂主人 | 釣玄堂、曳尾堂 | 享和元年（一八〇一） | 個人蔵 | 折帖形式 大阪市立美術館編『近世の大坂画壇』展図録（昭和五六年） 千葉市美術館ほか編『光琳を慕う 中村芳中』（芸艸堂平成二六年）『古画備考』 |
| 3 | 浪華画人組合三幅対 | | | 文化四年（一八〇七） | 大阪城天守閣蔵、大阪府立中之島図書館蔵、大阪歴史博物館蔵ほか | |
| 4 | 浪華画家見立角力組合二幅対 | | 大坂天神橋すし伏見阿替町 多田源板 | 文化六年（一八〇九） | 大阪歴史博物館蔵 | |
| 5 | 京風流絵合 | | | 文化九年（一八一二） | 宮城県立図書館蔵 | 桜田澹斎『画人等級』（宮城県立図書館蔵）に筆写される。 『古画備考』 |
| 6 | 平安画工視相撰 | | | 文化一〇年（一八一三）頃 | | 瀨木真一『江戸・明治・対象・昭和の美術番付集成 書画の価格変遷二〇〇年』（里文出版 平成一二年） |
| 7 | 古今名家競 | | | 文化年間カ | 個人蔵 | |
| 8 | 古今丹青競 | 鑑画堂主人 | | 文化年間以降 | 個人蔵 | 桜田澹斎『諸名家階級』（宮城県立図書館蔵）に筆写される。 |
| 9 | 古今画人競 | | | 文政七年（一八二四） | 宮城県立図書館蔵 | 桜田澹斎『諸名家階級』（宮城県立図書館蔵）に筆写される。 |
| 10 | 享保後画家競 | | | 文政一二年（一八二九） | 宮城県立図書館蔵 | 田中敏雄『近世大坂画壇研究のための二資料』（大阪市立美術館編『近世大坂画壇』同朋舎出版 昭和五八年） 林英夫 青木美智男『番付で読む江戸時代』（柏書房平成一五年）所収の「見立番付総合目録（データベース）」には『番附帖 秘』（阪大灘波家）との記載あり。 |
| 11 | 浪速諸流画人名家案内 | | 長浜丁はり五 | 天保元年（一八三〇） | 大阪城天守閣蔵、大阪大学蔵、大阪歴史博物館蔵 | 桜田澹斎『諸名家階級』（宮城県立図書館蔵）に筆写される。 |
| 12 | 当時名家競 | | | 天保二年（一八三一） | 宮城県立図書館蔵 | |
| 13 | 浪花諸芸 玉づくし | | | 天保一一年（一八四〇） | 個人蔵 | 何らかの番付集の零葉カ |
| 14 | 浪花画家名流 | 晴華島藍水 | | 弘化二年（一八四五） | 大阪歴史博物館蔵 | |
| 15 | 皇都画家名所比擬譜 | 雅中俗俗中雅人 | 版元某 | 弘化三年（一八四六） | 個人蔵 | |
| 16 | 同心御好乃道 | | | 嘉永三年（一八五〇） | 個人蔵 | 瀨木真一『江戸・明治・対象・昭和の美術番付集成 書画の価格変遷二〇〇年』（里文出版 平成一二年） |
| 17 | 都名筆画合 | | | 嘉永四年（一八五二） | 個人蔵 | |

| | | | | | | | |
|----|--------------------------------|--------------------|----------------|----------------|----------------|---------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 18 | 皇都開業名家対幅集 | 渦丸 | (記載なし) | (記載なし) | 嘉永四年(一八五二) | 個人蔵 | 横谷賢一郎「番付にみる幕末京都画壇の状況」(京都文化博物館学芸第一課編『都の絵師は百花繚乱』展図録 京都文化博物館 平成一〇年) |
| 19 | 古今名画鏡 | (記載なし) | (記載なし) | (記載なし) | 嘉永四年(一八五二) | | 林英夫 芳賀登編『番付集成(上)』(柏書房 昭和四八年) |
| 20 | 平安当流画香 | (記載なし) | (記載なし) | (記載なし) | 嘉永五年(一八五二) | 津市立中央図書館稲垣文庫蔵 | 筆写本 |
| 21 | 諸流派元鑑 | 千秋館主人編 梅樹園主人 賞月堂主人 | 興容館 山田舎 蔵板 | 興容館 山田舎 蔵板 | 嘉永五年(一八五二)以前 | 個人蔵 | 年代は「今光孚トヌ」の文言より光孚生前(嘉永五年没)であるところからの推定 |
| 22 | 本朝画事 | (記載なし) | (記載なし) | (記載なし) | 嘉永五年(一八五二)以降 | 個人蔵 | 年代は「光孚(中略)嘉永五年卒」の記載による。 |
| 23 | 浪華風流月旦評名橋長短録 | 墨池堂筆 | 東文堂 | 東文堂 | 嘉永六年(一八五三) | 大阪歴史博物館蔵、大阪市立図書館蔵ほか | 管 宗次『京大坂の文人 - 幕末・明治 -』(和泉書院 平成三年) |
| 24 | 古今南画要覧 | 水流主人田燕著、不如熱齋玉廻撰 | 水流山房蔵版 | 水流山房蔵版 | 嘉永六年(一八五三) | 個人蔵、東京都立中央図書館蔵ほか | 瀬木慎一『江戸・明治・対象・昭和の美術番付集成 書の価格変遷二〇〇年』(里文出版 平成一二年) |
| 25 | 帝京画家給銀位定 | 雲根流虹誌 | 版元浪華 | 版元浪華 | 嘉永年間(一八四八～五四)カ | 個人蔵、大阪府立中之島図書館蔵 | 林英夫 芳賀登編『番付集成(上)』(柏書房 昭和四八年)、『保古帳 6』(大阪府立中之島図書館蔵)所収 |
| 26 | 現故漢画名家集鑑 | 不如熱齋島克原輯 | (記載なし) | (記載なし) | 安政五年(一八五八) | 個人蔵ほか | 瀬木慎一『江戸・明治・対象・昭和の美術番付集成 書の価格変遷二〇〇年』(里文出版 平成一二年) |
| 27 | 【近世絵師見立番付 長崎夢幻主人編、霞酔主人集、眠雲主人補】 | 夢幻主人編、霞酔主人集、眠雲主人補 | (記載なし) | (記載なし) | 文久二年(一八六二) | 個人蔵 | |
| 28 | 南宗書画品価録 | 春泉居纂并識 | 伊勢松阪 晴雪堂春泉品鑑蔵梓 | 伊勢松阪 晴雪堂春泉品鑑蔵梓 | 慶応二年(一八六六) | 個人蔵ほか | 瀬木慎一『江戸・明治・対象・昭和の美術番付集成 書の価格変遷二〇〇年』(里文出版 平成一二年) |
| 29 | 現故書画高名一覧 | (記載なし) | (記載なし) | (記載なし) | (記載なし) | 個人蔵 | |
| 30 | 五名物おなじ島 | 酔興人 | (記載なし) | (記載なし) | (記載なし) | 個人蔵 | |
| 31 | 古今名画見立相撲 | (記載なし) | (記載なし) | (記載なし) | (記載なし) | 個人蔵 | 林英夫 青木美智男『番付で読む江戸時代』(柏書房 平成一五年)所収の「見立番付総合目録(ターナーズ)」には版元「書林兼草紙屋大坂心才ばしばくろろう町塩屋喜兵衛板」、「浪速土産五」所収との記載がある。なお筆者が実見し、この表に掲出した資料には「書林兼草紙屋」のみ印刷されており、それ以下は削除されている。 |
| 32 | 古今名画見立相撲続編 | (記載なし) | (記載なし) | (記載なし) | (記載なし) | 個人蔵 | 林英夫 青木美智男『番付で読む江戸時代』(柏書房 平成一五年)所収の「見立番付総合目録(ターナーズ)」には版元「書林兼草紙屋大坂心才ばしばくろろう町塩屋喜兵衛板」、「浪速土産五」所収との記載がある。なお筆者が実見し、この表に掲出した資料には「書林兼草紙屋」のみ印刷されており、それ以下は削除されている。 |
| 33 | 本朝近世画工鑑 | (記載なし) | (記載なし) | (記載なし) | (記載なし) | 個人蔵 | 林英夫 芳賀登編『番付集成(上)』(柏書房 昭和四八年) |

注 〔 〕内は仮称。記載の主要な対象または版元が上方に関する資料に限った。一枚刷に準じるものとして折帖形式や版行資料の写本も加えた。年代不詳のものでも明治初年までと思われる資料については含めた。およそ年代順に配列し、不詳の資料はそのあとにまとめた。桜田齋斎筆写本からは版行が明瞭な資料のみ採用した。筆写資料にあつては原資料の年代を採用した。